

「今、私の晴雨計は！(58)」

「我が思い出の愛唱歌」3

平山征夫

ここまで書いてきて突然ある

歌が浮かんだ。多分中学一年の音楽の教科書に載っていたと思う

が「暗路」(やみじ)という歌だ。

気にいって長い間歌っていたが、

「おぐらき夜半を 一人行けば」

ではじまるこの歌は「月の明かり

が漏れ一瞬間が破れ、ホトトギス

の鳴き声は何処かから聞こえた

が、なおも行くとまた暗が降りた」

という内容で変な歌だなと思っ

ていた。調べてみると明治42年

英国のライトンの曲に近藤朔風

が詞をつけたもので、別名「ホト

トギス」といわれるが、元のカー

ペンターという人の詞は「消えぬ

面影」というもので「別れた人の

面影がいつまでも消えない」とい

う内容でメロディにぴったり。永

年の疑念が晴れた気がした。

愛唱した抒情歌が次々に浮か

ぶ。「宵待ち草」はその代表だ。

恋多き竹久夢二が長谷川カタと

の失恋の中で書いた「待てど暮ら

せど 来ぬ人を 宵待草のやる

せなさ」の詩は夢二の悲しみが痛

いほど伝わってくる。そういえば

彼女もその後夢二と同棲するモ

デルのお葉も、そのお葉と夢二を

争う作家の山田順子も皆秋田美

人だ。私も大学卒業して日銀に入

行、すぐ秋田に赴任三年勤務した

が、夢二のように秋田美人に恵

まれず、多くの秋田勤務の先輩、

後輩がここで伴侶を得たのに対

し、独身で次の勤務地大阪へ向か

った(そこで撃沈するのだが：)。

牧水の詩による「白鳥の歌」も悲

しい。「追憶」も中学の音楽の教

科書にあって随分愛唱した。もと

はスペイン民謡のようだが、それ

に詩をつけて讚美歌としてアメ

リカで歌われていたのが、日本に

入ってきて昭和14年明大国文学

教授古閑吉雄が作詞したものだ。

戦後教科書に載ったので馴染み

のある人が多いが、それでも少し

若い人になれば同名の映画の主

題歌(歌はバーブラ・ストライサ

ンド)の方を思い起こすだろう。

少し新しいところの抒情歌では

「四季の歌」「忘れ名草をあなた

に」「知床旅情」「鈴懸の径」「庭

の千草」「ちいさい秋みつけた」

などだ。さらに旗照夫の「あいつ」

「爪」の二曲をよく歌っていて

「バラードの平山」と職場で言わ

れ悦に入っていた。「爪」につい

ては、優れたTVドラマ演出家で

執筆家でもあった久世光彦氏が

著書「マイ・ラストソング」で採

り上げ、ている。これは人生の最

後に聴くとしたらどの曲かとい

うことで、色々な歌を取り上げ想

い出やエピソードを雑誌に連載

したものだ。久世氏はこの曲は戦

後高度成長が始まる前のまだ貧

しかった日本で、アパートという

文化が生まれ、若い貧しい男女が

都会の隅でひっそりと暮らし始

めた時代の「早熟の悔い」を感

じさせる歌だと言う。「二人暮ら

したアパートを 一人ひとり
出て行くの」と別れを歌っている
が「貴方でなくては出来はしない
素敵な夢を持つことよ もうお
止しなさいね悪い癖 爪を噛む
のは良くないわ」と謳っていて洒
落ているなと思った。詞も曲も早
熟のマリンバ奏者平岡精二だが、
彼自身40代後半に酒におぼれ、
精神を病み、音楽を捨て、早くに
亡くなってしまった。2番の歌
詞は彼自身の人生を予見してい
たようで、余計「早熟の悔い」を
感じる。「若かったのね お互い
に あの頃のこと 嘘みたい：
私のことは大丈夫よ そんな顔
してどうしたの 直しなさいね
悪い癖 爪を噛むのは良くない
わ」。久世さんと仲良しだった向

田邦子は爪を噛む癖があった。だ
からマニキュアをしなかったそ
う。
今ならJポップというのだろう
が私たちは歌謡曲と区別してポ
ピュラーと称していたが、「学生
時代」(ペギー葉山)「恋人よ」(五
輪真弓)「いい日旅立ち」(谷村新
司)や、「秋桜」「無縁坂」「風に立
つライオン」(さだまさし)「秋止
符」(アリス)「希望」「今はもう
秋」「夜明けの歌」(岸洋子)と続
く。強い印象のある歌に「赤い風
船」(加藤登紀子)がある。「赤い
風船空の上 泣きながら街の中
追いかけて 坊や車に轢かれて
死んだ 可愛い坊やは死んだ」と
いう歌詞が衝撃的だった。この作
曲は久世さんのヒットTVドラマ

で寺内貫太郎役を演じた小林亜
星さんだ。
永六輔の作詞、中村八大作曲の
「遠くへ行きたい」は、同名TV番
組のテーマソングとして番組と
もども好きだった。独身寮に買い
込んだエレクトーン(結婚時、ヤ
マハの講師だった妻にさつさと
下取りに出される不運な運命を
辿るのだが・・・)で一番良く弾い
たのもこの曲だ。私のラストソ
ングはこの歌だ(あの世に行くのに
題名もぴったりだ?)。永六輔と
中村八大のコンビはヒット曲を
沢山生み出したが、曲を絶対とす
る(メロディに詞を合わせさせ
る)中村の作曲法に合わない永は
その後いずみたく(詞にメロディ
を合わせる)とコンビを組んだ。

「見上げてごらん夜の星を」はこ
のコンビが生んだ名曲でこれも
愛唱歌だが、「女ひとり」(京都)
など沢山のヒット曲を生んだ「日
本の歌」シリーズの中の「風が消
していく」(鳥取)は抒情歌だ。こ
れと並んで大好きなのが佐藤宗
幸の「岩尾別旅情」だ。「青葉城
恋歌」の方がヒットしたが、旅の
宿での寂しさを歌ったこの曲の
方が抒情性は高い。更に新しいと
ころではスタジオ・ジブリのアニ
メ映画「コクリコ坂から」の主題
歌「さよならの夏」と「春の風」
が良い。手島葵のかすれたような
声で歌うのも抒情性を高めてい
る。
抒情歌で圧倒的に人気のある賄
償千恵子のCDを見ていたら、「さ

くらのバラード」というのがあった。山田洋次作詞、山本直純作曲で聴いてみると寅さんの映画のシーンが浮かぶとても良い曲だ。「江戸川に雨が降る 渡し船も今日は休み 兄のいない静かな町」の出だしで映画のシーンが浮かぶ。ただ、この曲は何故か寅さんシリーズの16作目で歌われただけ、一九九六年渥美が亡くなり開かれた「寅さんとお別れ会」で「献歌」として賠償が歌った。大学4年間、男性合唱「グリーンクラブ」に属していたので、クラブ活動を通じて得た愛唱歌も幾つかあるが、その代表が「遙かな友に」だ。早稲田大グリーの指揮者だった磯部徹が合宿に参加出来なかった部員を思っって創った

曲だが、大学の男性合唱全体の愛唱歌として広く歌われている。映画音楽では「シエルプールの雨傘」が一番、映画の最後雪のガソリンスタンドで偶然の再会し別れるシーンがいつまでも残る。主演のドヌーブも美しかったが、この曲も美しかった。フランス語で歌ったり、ピアノ、エレクトーンなどでよく弾いた。「ひまわり」は歌詞がないので演奏と鼻歌だ。何度聴いても戦争で引き裂かれた男女の切ない気持ち伝わってくる。「太陽がいっぱい」「鉄道員」「第三の男」「禁じられた遊び」「ロシアより愛を込めて」「エデンの東」「ゴッドファーザー愛のテーマ」「男と女」「ブーベの恋人」「ジャニギター」「夜霧のしのび

あい」「慕情」「シャレード」「白い恋人たち」「悲しみは星影と共に」などが次々と浮かぶ。特に「ウエストサイド物語」と「サウンドオブミュージック」を代表とするミュージカルの何曲かにまつた。「トウナイト」「マリア」や「サウンドオブミュージック」の主題歌、「エーデルワイスの歌」、”屋根の上のヴァイオリン弾き”の「サンライズサンセット」や「マイフェアレディ」の「踊り明かそう」等々・・・。

うフランシス・レイの出だしの部分はリリカルで感情が一挙にこみあげる。「スカポローフェア」は「卒業」の挿入歌でサイモン＆ガーファンクル（S & G）の歌だが、元は一六世紀の民謡だ。式最中の教会から花嫁を奪う痛快なシーンとこのケルト風の歌に魅了された。歌おうと思って歌詞を見ると、実に変わった詩が並んでいた。「スカパーラの市に行くならかつての恋人だった彼女によるしく言ってくれ」というのだが、「針仕事なしでシャツを作れたら」「そのシャツをあの涸れた井戸で洗えたら」「イーカーの土地を見つけ羊の角で耕しコシヨウの実をまけたら」などの難題が続き、「そうしたら恋人に」

と男女双方の立場から歌っている。10番以上ある長い歌詞の2フレインに「パセリ、セージ、ローズマリーにタイム」の詞が登場する。映画を観た後、私はS & Gをマネして息の多い発声で、この不思議な歌詞を良く歌った。S & Gでは「サウンドオブサイレンス」「明日に掛ける橋」も愛唱した。

このほかではフォークの女王ジヨン・バエズの「ドナドナ」「朝日のおたる家」や、フォーク・ロックのボブディランの「風に吹かれて」、ピーターポール & マリー（PPM）の「花はどこへ行った」、カンツォーネで「愛は限りなく」なども思いだす。シャンソンやタンゴに夢中になった分、当

時の若者が熱中したジャズやロックなどには疎遠だったが、そんな中でもプレスリーの歌の中でスローな「ラブミーテンダー」「好きにならずにいられない」「エンジェル」は好きだし、シナトラの「夜のストレンジャー」「マイウェイ」、フライミトゥーザムーン、トムジョーンズの「想い出のグリーングラス」、ウド・ユルゲンスの「別れの朝」などは、歌唱力に魅了され、マネして歌っていた。

まだある。「恋の街札幌」「池上線」「北へ」「マディソン群の恋」「愛しき日々」など、歌謡曲にも沢山ある。杉良太郎の「すきま風」「明日の詩」は一時カラオケで良く歌っていた。「そうさそれでも生き

てさえいれば いつか優しさに巡り合える」「泣いて昨日を振り返るより 明日の詩を歌おう」という歌詞は、ちよつと気障だが気に入っていた。

まだまだ尽きないが、この辺で閉めようと思う。少年の頃からの愛唱歌を並べたのは、やはり歳のせいだろう。現に書きながら、ここで挙げた愛唱歌を全部歌ってからあの世に行きたいと思った。自分の来し方を思い浮かべながら、「宵待ち草」や「さくら貝の唄」など涙なしで歌えるかなと想像をめぐらしていたら、目前の日経の「私の履歴書」が目に入った。防衛大学学校校長等を歴任された政治歴史学者の五百旗頭真さんの連載、その日のタイトルは「妻

の旅立ち」だった。数年前に奥様を臍臓がんで亡くされた時のことが綴られていた。告知された奥さんは「他の家族でなく、私でよかったと思います」と言われたそう。五百旗頭さんは「思いがけない衝撃の言葉だった」と書いている。病状が悪化し奥さんのベッドの横にマットを敷いて寝るようになっていたある夜、「寝つけな

いのか一緒に歌いたいと言う。歌集を見ながら「月の砂漠」から歌い出した。一緒に歌うと不思議な共感があった。かなり歌った後、「惜別の唄」となった。共感が在り過ぎてまずいのではないかと気が、「遠き別れに耐えかねて」と妻の方から歌い始めた。三番の「君がさやけき目の色も、君紅の唇

も”まで来て妻の声が止まった。見ると『もう碧の黒髪じゃないもん』と涙していた」とあった。ジーンときた。「またいつか見んこの別れ」ではない永遠の別れを目前にして歌う「惜別の唄」だった。惜別の唄は、藤村の「若菜集」中の“高樓”という嫁ぐ姉に別れを告げる妹とのやりとりの長い詩から四節を取だし、「姉よ」を「友よ」に変えて譜をつけたもの。作曲者の藤江英輔氏は当時中央大学生、学徒動員で戦地に赴く友人への惜別の唄であった。これが歌われ出したのは私が生まれた一九四四年、一緒に歩んできた歌なのだ。

(令和元年5月20日)

